

Schellenberger and Nordhaus, *The Death of Environmentalism* (2007) 査読評価書

平成 19 年 5 月 24 日

山形浩生

Executive Summary

現在の環境保護議論、特に地球温暖化議論は、人々を脅し、災厄と不幸のイメージばかりをふりまき、基本的に後ろ向きな未来像しか提供できないために広範な支持を得るにいたっていない。過去の環境保護運動が成功したのは、何よりも社会が豊かさを増してそうした課題に取り組むだけのゆとりができたからである。

したがってもっと前向きで明るい環境保護運動を実現しないと効果のある温暖化対策はできないし、生活を豊かにしてもっとゆとりを持たせなければ人々の支持も得られない、というのが著者らの主張である。具体的には新エネルギー開発に政府が 10 年で 3000 億ドルを投資する新アポロ計画なるものを推進し、これにより炭酸ガス排出を劇的に減らすとともに経済発展と新規雇用の確保、およびアメリカの技術的優位性の回復を目指すべきであると著者らは主張する。

現状の環境保護運動に関する批判としては興味深い。しかしながら、前向きな環境運動として提案されている新アポロ計画についての記述はあまりに薄い。また技術開発は金さえかければなんでも成果があがるものではない。この計画についての記述がないに等しく、実現性もきわめて怪しいため、本書は「前向きな環境運動を！」という同じスローガンの反復以上のものにはなり得ておらず、羊頭狗肉というか大山鳴動してなんとやらのそしりをまぬがれない。また視点や主張はあまりにアメリカ中心的なこともあり、翻訳の意義は必ずしも明らかではない。

1. 概略

本書は著者たちが環境保護運動活動を行う中で作成したパンフレットをもとにしている。著者たちは、地球温暖化がきわめて大きな問題であるにもかかわらず、なぜそれがアメリカ国民に重視されないのか、と問う。それは従来の環境保護運動が災厄と不幸をたねに人々を脅すものであり、さらに国民が重視している生活水準の向上や雇用創出、アメリカの技

術優位回復といった発想を理解せずそれを馬鹿にするような態度すらとっているからだ、と著者たちは述べる。こうした発想を著者たちは環境保護運動の誕生にまでさかのぼって検討し、陰気な環境保護論は昔から支持を得られず、成功した環境保護運動はむしろ投資を促進し、雇用を作り出すものだったと述べ、環境運動という狭い枠を越えて国民の関心とうまく方向性を一致させた運動のみが成功することを指摘する。温暖化対策においても、新エネルギーへの公共投資を大幅に拡充し、新規雇用を増やす前向きな提案を行うことが今後の環境保護運動の課題であり、その具体案として共和党の新アポロ計画を提唱し、一方で後ろ向きな提案の多い民主党を批判する。

2. 作者

著者たちについては不詳。昔からの環境保護運動家であることしかわからない。

3. 内容詳細

序文

かつてキング牧師は黒人市民権運動の演説において、後ろ向きなメッセージを述べるのではなく「I have a dream」と前向きなメッセージを述べることにより、時のケネディ政権の支持も獲得して目的の実現に向けて大きな前進と遂げた。黒人がいかにひどい状況に置かれているかを訴え続けるだけでは、成功はおさめられなかったはずだ。環境保護運動も、人々の活動を制約して我慢を強いる政策と、もっと希望の持てる政策との岐路に現在はあるのだ。

第一部：過去

環境運動をその誕生にさかのぼって振り返り、負のイメージと脅しに頼る現在の環境保護運動のまちがい、偽善、欺瞞を指摘する。

第一章 環境保護運動の誕生

環境保護運動は1960年代に誕生したとされる。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』による環境活動家たちの活動や、シエラクラブによる自然保護運動が政策を動かし、物質規制や公害対策、自然保護区の設定などが行われたとされる。

だが実際にはこれはまったくのウソであり、自分をよく見せたい環境保護活動家による作り話である。森林火災や地球の写真、殺されるアザラシといった写真によるイメージ戦略に環境活動家は頼ろうとするが、そんなものはほとんど意味を持っていない。

人々が自然破壊や公害を気にするようになったのは、人々が戦後に豊かになって自然を享受できたり生活水準を高めたりすることを気にかけるだけの余裕ができたからである。豊かになったからこそそうした問題に人々が感心を持つようになったのである。環境保護活動家は豊かさが環境の敵だと思いがちだが、それはまったく逆であった。量的な充足が果たされ、質的（ポスト物質的）なニーズを人々が求めるようになって初めて環境意識が芽生える。

第二章 木を見て森を見ず

環境保護活動は、ノーベル平和賞を取ったチコ・メンデスやワンガリ・ムタ・マータイの活動のうち、人間と関係のない森林保護や植林活動にばかり注目する。だがかれらの活動のは一方で貧困救済活動や格差是正活動に根ざしており、それがあからこそ現地でも多くの人の支持を得られている。それを敢えて見ないことで環境保護活動は、人々から自分を阻害してしまっている。そしてかえって貧困者に害をなすような活動ばかりを主張するようになっていく。ブラジルの森林破壊の本当の原因を考えず、炭素取引といった小手先の技にばかり頼ろうとしている。アマゾンを救いたいなら、ブラジルの人のために何ができるかを考えなくてはならない。

第三章 人種

迷惑施設は黒人や少数民族の多い貧困な地域に作られることが多い。喫煙率は黒人や貧困者のほうが高い。環境保護論者の一部は、これは人種差別政策のあらわれであり少数民族や貧困絶滅の陰謀だといった幼稚な陰謀論をふりかざす。だが実際には単に貧困者は貧困だからそうしたところに住み、健康のことを気にする余裕がないというだけのこと。貧困をなんとかしないとそうした問題は解決されないが、環境活動家はたばこ会社を訴えてみたり、環境的公正といった本質とは関係ない馬鹿なことばかりやっている。だが実際に黒人の健康や公害被曝減少に貢献したのは、全アメリカ人を対象にした大気汚染法などの規制であった。なまじ人種を強調しないほうが問題解決に役に立つし、豊かさと環境保護を相反するモノと考える発想こそが環境保護をせせこましいものにしてしまっている。

第四章 場所

ロバート・ケネディ・ジュニア議員は環境保護派だったのに、自分の家の近くに風力発

電プラントができるのに反対してみせた。環境保護運動は自分の好きなものばかり守ろうとする金持ちの活動になってしまい、結果としていやなものをどんどん自分の目の届かないところに追いやってかえって事態を悪化させてしまっている。多くの環境活動は、特定の地域にばかりこだわって、全地球のことを考えられずにいる。また地元の風力発電にすら耐えられない連中が、中国の火力発電所にどんな代替案を提供できるというのか？

第五章 公害パラダイム

公害は負のイメージを広めることで人々の関心を引き、対策につながったかもしれないが、温暖化ではそのパラダイムは機能しない。公害は、だれか悪者を見つけてそいつにコストを負担させればいい。だが温暖化にはそうした便利な悪者はいないのである。そうした発想の結果が京都議定書だが、批准した多くの国はまったく目標を達成できていないし、排出権を購入して貧困国を貧困なままに強制することでそれを達成しようとしている。これは公害パラダイムの失敗を告げるものだ。

第六章 環境保護活動の死

環境保護活動は、環境破壊が人類の罪に対する報復であるかのように論じ、人間さえいなければ環境は安定して永続的だと言いたがるが、実際には環境だって始終変わるのである。気候だって人間がなくても変動したし、生物種だって何度も大絶滅を経ている。いま起きているものだけを特別視してはいけない。また環境保護活動家は、自分たち以外の人間を貪欲で目先のことに捕らわれたバカだと見下しているが、実は同じ穴の貉だ。絶滅や死ばかりに目を向けず、新しい状況に適応できる新しい政策の方向性を考える必要がある。

第二部：未来

第七章 安全保障

アメリカのリベラル派は環境保護活動家は、人々が環境保護に熱心でないのはバカで自分の利益がわかっていないからだと考えている。だがそれは悪しきエリート主義的な発想である。現在のアメリカ人は豊かだが将来の見通しに不安を抱いており、安全保障がないと思っているために、環境に配慮するだけの余裕がないのだ。

第八章 帰属感と充足感

多くの社会運動が成功しているのは、コミュニティのニーズにきちんと応えられている

からだ。先進的な社会運動と見えたモノは、根底にある程度の豊かさがあってこそ可能になった。その豊かさを否定するような運動は成功し得ないのである。そして環境保護運動はコミュニティ的な感覚も作り出せず、孤立した個人の集合となってしまっている。

第九章 プラグマティズム

環境保護運動は、多くの場合に非現実的な要求をしすぎる。我慢しろ、生活水準を下げる等々。そうしたプラグマティズムに欠ける主張が環境保護運動をダメにしている。

第十章 偉大さ

必要なのはビジョンを作り出すことである。民主党は、ビジョン——そしてそれに伴う現実——を創造できず、事後的にそれを観察することに甘んじてきたために、新しい動きを作り出すことに失敗してきた。フランシス・フクヤマが主張するように、偉大なものをきちんと定義して、それに向かって動くことが環境保護運動にとっても重要である。それを提示できれば人々は物質的な関心からポスト物質的な関心に意識を向けるようになる。その例として著者が提示するのは、新エネルギー開発への大規模な公共投資、名付けて新アポロ計画である。10年にわたり3千億ドルの公共投資をすることで、2千億ドルの民間投資と、三百万の新規雇用が生み出され、アメリカの技術優位は回復し、貿易赤字も削減するであろう。

4. 評価

環境保護活動家自身が自分たちの運動をふりかえり、その問題点を指摘したという点では本書は興味深いものであり、一定の意義を持っていると考えられる。その批判もそれなりに的を射ている。災厄と不幸と脅しに頼り、禁止と制限ばかりの運動が決して大衆的な人気を得られないという主張は傾聴に値する。環境保護運動に必要なのは、将来への希望を与えるメッセージであり、経済発展や雇用確保、技術優位回復といった人々の期待に沿った環境保護運動を展開することで、いまは産業界などと乖離している環境保護を挙国一致の活動目標にできるはずだ、という主張は理解できなくもない。

しかしながら、その具体的な案はないに等しい。人々のニーズにあったとか、支持を得られるとかいうだけでは、お題目にすらならない。かろうじて提示されている新アポロ計画についての詳細はあまりに薄い。新エネルギー開発に政府が10年で3000億ドルを投資する、と書かれているだけである。実際にはこれは何ら目新しいことではない。石油危機

時代にも日本のサンシャイン計画をはじめ世界各国で新エネルギーへの公共投資は大量に行われている。しかしエネルギー開発は物理の基本的なところの改良を要するために、金をかければ成果があがるものではない。この計画の実現性がきわめて怪しいし、著者たちも明らかにこの細部についてはまったく具体的な見通しを持っていない。

このため本書は「従来の後ろ向きな環境保護運動はだめだ」という主張だけに全 332 ページのうち 310 ページを費やし、その新アポロ計画についてはたった 2 ページほど触れただけ。その後は民主党やブレア政権の批判に逆戻りしてしまう。前向きな環境保護運動をといいつつ、何一つ前向きな提案ができていない。

本書はもともと著者たちの作成したパンフレットであり、その水準ではこの程度の粒度の記述でももっともらしかったのだろう。だが一冊の本にまで拡大したとき、最終的な提案の危うさは羊頭狗肉のそしりをまぬがれない。

さらに主張の多くは、民主党が云々、アメリカの技術優位がどうこうと、きわめてアメリカ中心的なものとなっている。

全体として翻訳に価するかは疑問である。既存の環境運動の見直しと批判という点では一定の意義を持つものの、それにかわる方向性の提案がなければ、あまり現実的な意義もインパクトもない。

以上